

保育学生の意識の変遷と体力の年次推移

—40年を振り返って—

The Evolution of the Nursing Course Students'

Awareness of the Responsibilities of Nurturing

and the Annual Transition of their Physical Strength

—Looking back over the forty years of training (education)—

森崎 陽子 小笠原真弓 金谷有希子

Youko Morisaki Mayumi Ogasahara Yukiko Kanatani

要 約

社会情勢の移り変わりは、その時代の暮らしを変え、教育を変え、人を変えてきた。保育者養成機関として、保育のあり方の変化を捉え、保育者を志望する学生の実態を把握し、対象に応じた教育を編成しなければその時代に求められる保育者を養成することはできない。本学では1977年より、保育科入学生を対象に保育職に対する意識調査を行ってきた。また研究者の担当科目が「体育」であることから保育者の健康・体力の必要性を唱えており、入学生の体力診断テストも継続して行ってきた。本研究では、40年、20年前を振り返り現保育学生と比較検証を試みることで、現保育学生の保育職に対する意識と体力の実際を把握し今後の養成課程に役立てたいと考えている。

序論

幼児を取り巻く社会情勢はめまぐるしく移り変わりその変化に適応しながら保育の在り方も変貌を遂げてきている。

近年における大きな変革は平成元年の「幼稚園教育要領」の改訂であった。戦後の日本は急激な高度経済成長を遂げたが、生活の合理化、機械化は子どもを取り巻く環境にも大きく影響を及ぼし、昭和50年代に入ると子ども文化の荒廃が叫ばれる。

子どもにとって多くの学びの場であった自然環境に変わり、道ができ建物が立ち並んだ。高まる学歴主義は親達を早期

教育に走らせた。そしてファミコンなど遊び道具の進化。これらは戸外で群れて生き生きと遊ぶ子どもの姿を徐々に少なくしていった。このような状況の変化を受け、子どもの体力の低下や子ども社会における人間関係の問題、また知育重視の幼児教育に期待が高まるなどの問題が浮上した。この改訂は、今後の保育の在り方を見直し改善するべく、前回改訂から25年を経て着手されたものであった。

幼児教育の基本を、これまでの教員主導から子どもの特性を踏まえ環境を通して行うものとし、あくまで子どもの主体性を重んじ、遊びを通しての総合的な指導とした。また、従来の小学校教育と関連付けられた内容区分の6領域「健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作」が見直され、子どもの発

達を見る視点として「健康、人間関係、環境、言葉、表現」の5領域に変わった。続く2年には保育所保育指針が年齢区分を8段階に細分化、3歳児未満児は領域に分けず一括して示し、3歳児以上は幼稚園教育要領に準じた。

領域「健康」にも大きな変化があった。従来は体の健康のみを扱って来ていたがこの改訂では、体と共に心を子どもの自発的な遊びの中で育て充実させていくこととした。

平成10年幼稚園教育は「生きる力の基礎を育てること」して幼稚園教育要領を改訂、それに習い11年には保育所保育指針が改訂された。核家族化や女性の社会進出、地域の子育て力の低下を鑑みて、新たに幼稚園・保育所に「子育て支援」の役割が導入された。領域「健康」には、子どもの興味を自然や戸外にも向くようにすることや、基本的な生活習慣を身につける中で子どもの自立心を育て、他の子どもと関わりながら主体的な活動を育てていくことなどが新しく加えられている。

このように子どもの体力に関しては、子どもを戸外に向ける試みや身体活動を広く奨励し、60年代以前の体力を取り戻す努力が重ねられ平成10年以降にはようやく回復の兆しを見るが、新たな問題として体力の二極化が取り立たされてきている。

その後も国際化、都市化、女性の社会進出、核家族化、少子高齢化、地域社会の人間関係の希薄化はさらに進み、進化を遂げる社会とは裏腹に人間関係の歪みが児童の虐待や貧困、いじめ問題などの増加に現れる。それに伴い保育ニーズの多様化が求められた。

そんな中、平成4年から徐々に取り組まれてきていた「学校週5日制」は平成14年から完全実施されたが教育の軟弱化が反省され20年からは時間増加へと見直される。

平成20年改訂の「幼稚園教育要領」の要点は幼稚園生活と家庭生活の繋がりや子育て支援と預かり保育の充実などである。翌年「告示」となった「保育所保育指針」は、保育所の役割の見直しや保育内容の改善、保護者支援や小学校との連携等が打ち出された。「健康」領域では「食育」が取り上げられ人と食べることを楽しむことや、運動面では子どもの自ら体を動かそうとする意欲を育てる工夫をすることが保育者に求められている。保護者支援や家庭との連携、小学校との連携を重視することで失われつつある子どもを育てる組織の再構築が図られたのである。

平成27年には子ども子育て3法案が成立し、子育て支援の組織化、「教育、保育を全ての子どもに平等に」を目的として認定こども園化が本格的に進められている。

平成30年「学習教育要領」が改訂施行される。児童虐待やいじめの増加、家庭崩壊は、教育の目的としてきた「人間のより良い人格形成」から逸脱するものである。修正を図るために、これまで子どもの遊び社会において、家庭において、また地域において育まれてきた「人間としていかに生きるべきか」を学ぶ「道徳」を小学校以上に教科として位置づけた。また、自ら考え発動するアクティブラーニングの導入が奨励されている。

「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」平成27年より認定こども園のために作られた「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」ともに従来の5領域の「ねらい」、「内容」はほぼそのままに、加えてそれぞれの保育機関の教育、保育課程の中で育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、「健康な心と体、自立心、共同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現」の10項目を挙げ育ちの方向性を示し、小学校との連携も重視した。また、「保育所保育指針」「教育・保育要領」では、特に乳児期の保育内容の充実や保育所保育における幼児教育の充実、そのための保育者の質の向上を挙げている。

本研究では、平成10年代即ち、ゆとり時代に学童期を育ってきた本学学生が保育者養成にどのような意識を持ち養成課程に臨んできているのかを、時代背景が異なる40年前、20年前の保育学生との意識の違いの比較検証を行う。また、乳幼児期は心と体が渾然一体となり成長する時期である。子どもの活動意欲を育てることは運動機能を高めると共に人格形成の土台作りに関わる大切な機会と考えられる。望ましい遊びの環境設定や、運動の原理を理解した上で必要に応じた適切な助言や援助を行うことができる保育者は、やはり自分自身が多くの経験を経て遊びの楽しさを体感した者であり、子どもと一緒に汗を流し共感できる者である。保育学生の健康に対する認識と合わせ同時代の体力の移り変わりも視て行きたい。

この結果は、幼児教育の変革に応じた保育者養成を叶えるために保育学生の意識へのアプローチの方向性を示唆するものと考えられる。

研究方法

1. 調査方法

1) 保育科系短大生意識調査(日本私立短期大学協会保育科研究委員会による。)を実施

期間及び対象

第1回調査 1977年4月 本学保育科入学生 53名

第2回調査 1997年4月 本学保育科入学生 66名

第3回調査 2017年4月 本学保育科入学生 105名

調査内容 省略

2) 文科省旧スポーツテストより体力診断テストを実施

測定種目

反復横跳び・垂直跳び・伏臥上体そらし・立位体前屈・背筋力・握力・踏み台昇降運動

期間及び対象

第1期 1979年～1983年5月 本学保育科入学生

第2期 1984年～1988年5月 本学保育科入学生

第3期 1989年～1993年5月 本学保育科入学生

第4期 1994年～1995年5月 本学保育科入学生

第5期 2016年～2017年5月 本学保育科入学生

対象人数

年	人数	年	人数
1979	53	1989	76
1980	51	1990	87
1981	53	1991	69
1982	59	1992	65
1983	54	1993	58
1984	56	1994	63
1985	51	1995	56
1986	61	2016	67
1987	57	2017	83
1988	56		

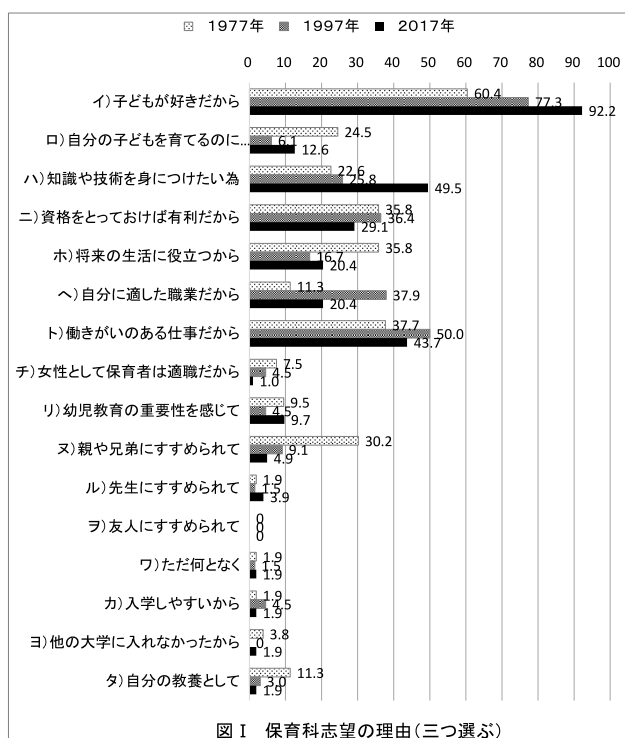
結果及び考察

1 意識調査から

3回の意識調査結果を比較検討し、現保育学生の意識を分析していく。

今回調査では、1位は「子どもが好きだから」92.2%、2位「知識や技術を身につけたい為」49.5%、3位「働きがいのある仕事だから」43.7%であった。77年(60.4%)97年(77.3%)調査共に1位は「子どもが好きだから」であるが近年になるほど割合が高くなる。2位は77年(37.7%)、97年調査(50.0%)共に「働きがいのある仕事だから」であったが今回は「知識や技術を身につけたい為」、3位に77年は「資格を取っておけば有利」「将来の生活に役立つから」が同じ35.8%、97年は「自分に適した職業だから」37.9%であった。4位には、77年「親や兄弟にすすめられて」30.2%、97年「資格を取っておけば有利だから」36.4%、今回も同じく29.1%であった。77年3位の「将来

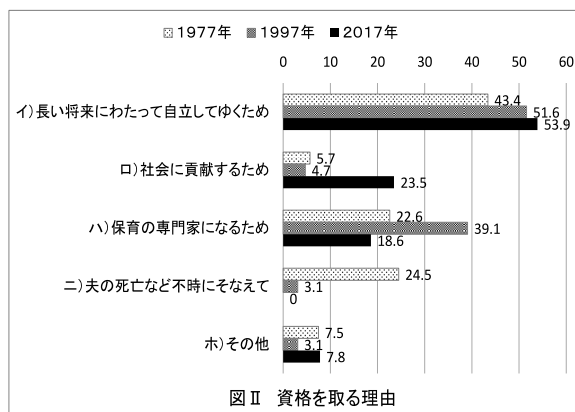
の生活に役立つから」は97年6位、今回5位、77年5位「親や兄弟にすすめられて」は97年今回共にほとんど該当者が1) 保育科志望の動機(図I)



なくなっている。

以上の結果から 97年、現学生共に自分の意志を持って志望し、入学時より保育職に就くことに積極的であることが読み取れる。しかし、97年は3位に「自分に適している」と4割近くが答えているが現学生は2割に減少している。「自分が適している」と言うよりも保育職の「知識や技術を身につけたい」意向が強く出ている。

2) 資格を取る理由(図II)



今回の調査対象者は全員資格を取ると答えている。その理由として、1位「長い将来にわたって自立してゆくため」53.9%、2位「社会に貢献するため」23.5%、3位「保育の専門家になるため」18.6%と、この3項目に9割を超える学生が答えて

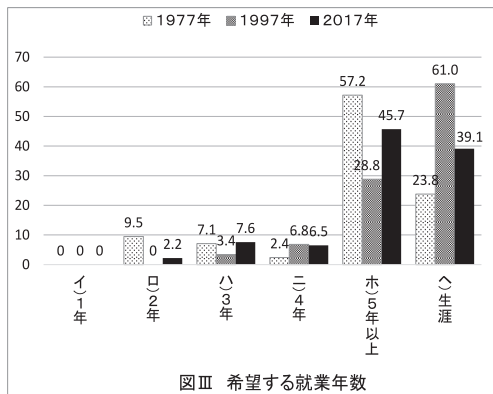
いる。77年は1位「自立していくため」43.4%、2位「夫の死亡など不時にそなえて」24.5%、3位「保育の専門家になるため」22.6%であった。97年は1位「自立していくため」51.6%、2位「保育の専門家になるため」39.1%、この2項目を9割以上の学生が理由として選んでいる。77年とは異なり97年と現在の学生は、卒業後すぐに資格を就職に役立てたい意志が感じられる。異なるのは、現学生の方が「社会のために」の気持ちが強く現れている点である。近年社会問題となっている待機児童や保育者不足に少しでも貢献したいとする意識の現われではないかと推測する。

3) 卒業後の志望就職先(表1)

就職場所	1977年 N=42		1997年 N=59				2017年 N=92				
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	
幼稚園	公立	30	71.4	16	27.1	10	16.9	32	54.2	20	21.7
	私立	2	4.8	32	76.2	49	83.1	27	45.8	56	60.9
保育所	公立	13	31.0	15	25.4	28	30.4	7	7.6	19	20.7
	私立	0	0.0	9	15.3	27	45.8	7	7.6	16	17.4
施設	公立	4	9.5	3	5.1	4	6.8	2	2.2	19	20.7
	私立	0	0.0	1	1.7	4	6.8	2	2.2	19	20.7
認定こども園											

卒業後、保育者として働きたいと、今回の調査では90.5%が答え、(77年79.2%、97年89.4%)保育職に就く意思が強い。まだ分からないと答えているのは7.6%(77年18.9%、97年9.1%)。その他は保育者として働く意志がないものである。ではどこで働きたいかについて(複数回答可とする)、今回調査では、「保育所」60.9%、「幼稚園」43.5%、次いで今回調査で加えた「認定こども園」20.7%、「施設」17.4%であった。今回調査で初めて保育所が幼稚園を(17.4%)上回った。また、77年ではほとんどの学生が公立を希望したが、97年では公立採用の厳しさからか私立希望が増えたが、今回調査では公立希望が前回より増えている。ここ数年の公立採用状況をみると保育者不足が影響しているのか現役学生の採用が増える傾向にある。このようなことが反映されているのではないかと考える。

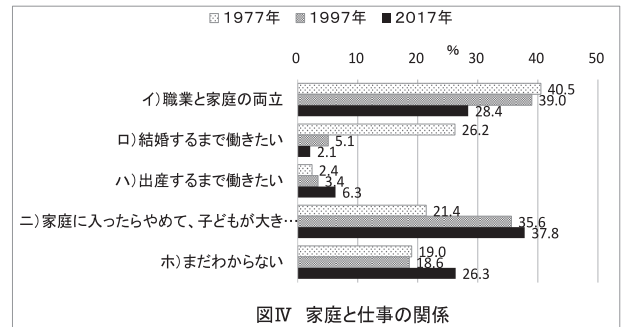
4) 希望する就業年数(図III)



今回は上位から、「5年以上」45.7%、「生涯」39.1%、「3年」7.6%、「4年」6.5%であった。77年は今回と同傾向を示しており、「5年以上」57.2%、「生涯」23.8%、「2年」9.5%、「3年」7.1%、「4

年」2.4%である。97年は異なり、1位「生涯」61%、2位「5年以上」28.8%、次いで「4年」6.8%「3年」3.4%でありできるだけ長く勤めたい意識の高さをうかがうことができた。現学生も直ぐに仕事に就く意識は高いものの、「5年以上」の区切り考えている学生が一番多い。

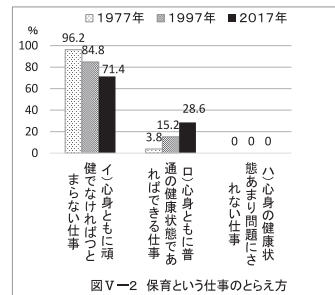
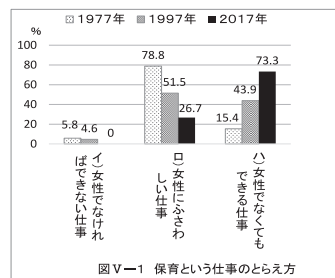
5) 家庭と仕事の関係(図IV)



今回は上位から、「家庭に入ったらやめて、子どもが大きくなったらまた勤めたい」37.8%、「職業と家庭の両立」28.4%、「まだわからない」26.3%であった。77年は「両立させたい」40.5%、「結婚するまで働きたい」26.2%、「また勤めたい」21.4%。97年は「両立」39.0%、「また勤めたい」35.6%、「まだわからない」18.6%であった。

77年は「結婚するまで」が3割近くいるのに対し、「生涯勤めたい」希望が多い97年は、「両立」もしくは「また勤める」で8割近くを占めている。現学生は「また勤めたい」がこれまでの調査とは異なり一番多く、「両立」を約1割上回る。仕事よりもまず自分の生活を大切にする現代の若者の考え方を読み取ることができる。

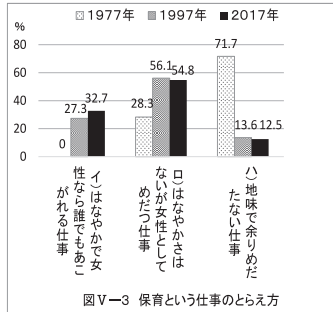
6) 保育という仕事のとらえ方(図V)



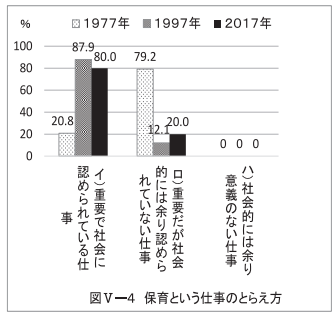
V-1 「女性でなくてもできる仕事」が調査ごとに高くなり、今回調査で7割を超える学生が答えている。1977年保父が認定されて40周年となる。20年前以上に男女共同参画社会が進行する現在、保育が「女性だけの仕事ではない」の考え方が浸透してきていることがわかる。

V-2 健康に対する考え方では、「心身ともに頑

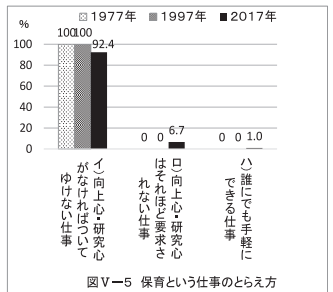
健でなければつとまらない仕事」は、77年96.2%、97年84.8%、今回は71.4%であった。保育職に対する健康面での意識が次第に低くなってきていることがうかがえる。次項において保育学生の体力の推移を検証していきたい。



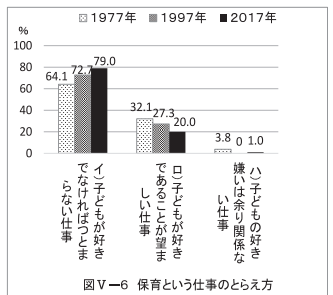
V-3 77年調査においては「地味で余りめだたない仕事」が7割を超えていたが、20年後97年には「女性の仕事として」認識され保育職へのイメージが大きく変わっている。今回調査も同傾向であるが、さらに「女性ならあこがれる仕事」が支持されてきている。



V-4 社会に認められているかについては、「認められている」77年(20.8%)から97年(87.9%)に向けて時代の社会状況が反映され全く逆の評価の仕事として認識された。今回調査も前回とほぼ同傾向を示している。

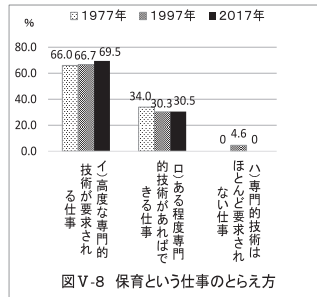


V-5 77・97年共に「向上心・研究心なければつとめない」が100%の認識であったが、今回調査では6.7%の学生は「向上心・研究心はそれほど要求されない仕事」と答えている。



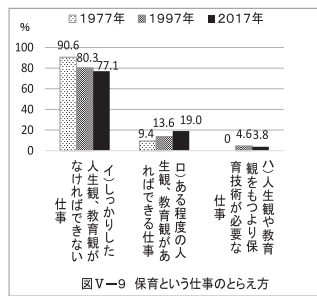
V-6 子どもが好きであることとの関係では、「好きでなければつとまらない」は77年61.4%、97年72.7%、今回調査は79.0%と増加している。40年前は保育者主導の保育が展開され高い指導技術重視の時代と言える。しかし子ども主体となった現行の保育(1989年(平成元年)以降)においては、まず「好きでなければ」が妥当な考え方といえるであろう。

V-7 対人関係の問題では、77年、97年同様に、対人関係はほとんどの学生が「難しい仕事」と答えている。



V-8 専門技術の関係では、77年66%、97年66.7%、今回調査69.5%とやや上昇傾向ではあるが、保育者の質の向上が叫ばれてきているにもかかわらず未だ3割の学生が専門的技術を重視

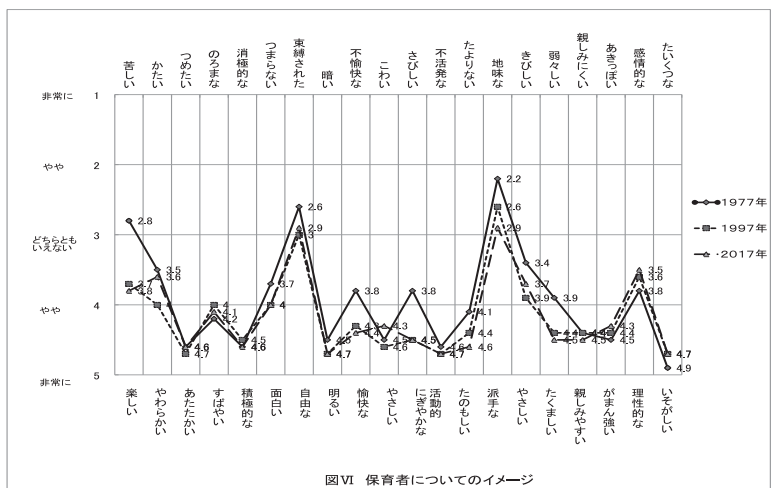
しない考えを持っている。



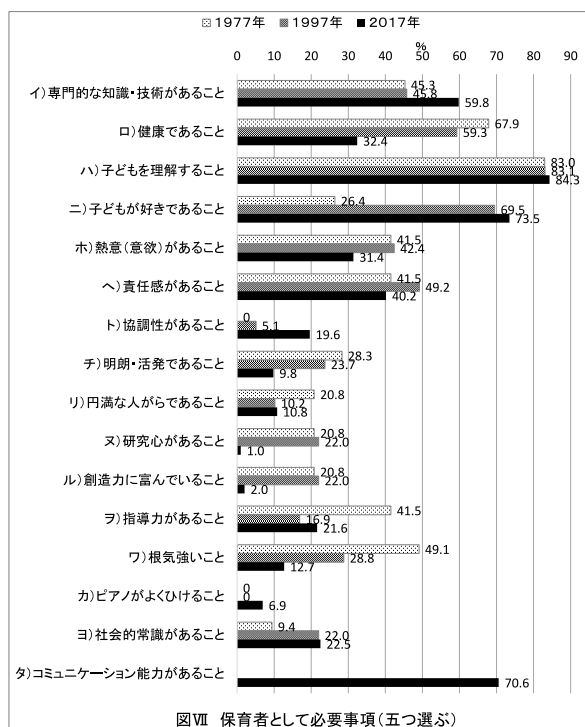
V-9 人生観、教育観に対しても、「ある程度あれば」が77年9.4%、97年13.6%、今回19.0%と高くなる。近年になるに従い保育職に対する認識が低調になってきている傾向が読み取れる。

7) 保育者についてのイメージ

これまでの調査から今回調査まで保育者のイメージとして変わらない事項は、「あたたかい」「積極的」「明るい」「活動的」「親しみやすい」「がまん強い」「いそがしい」であるが、調査ごとに好意的なイメージとなってきた事項は、「苦しい」から「楽しい」へ、「不愉快」から「愉快」へ、「さびしい」から「にぎやか」に、「たよりない」から「たのもし」へ、「地味な」から「派手」へ、「弱々しい」から「たくましい」である。77年調査では、「苦しい」「束縛された」「地味な」少々非好意的な保育者に対するイメージから、97年には好意的な見方に転じてきていたが今回調査ではさらに「楽しい」「愉快」のイメージが高くなっていくに加え「たのもし」「たくましい」イメージを強くしている。



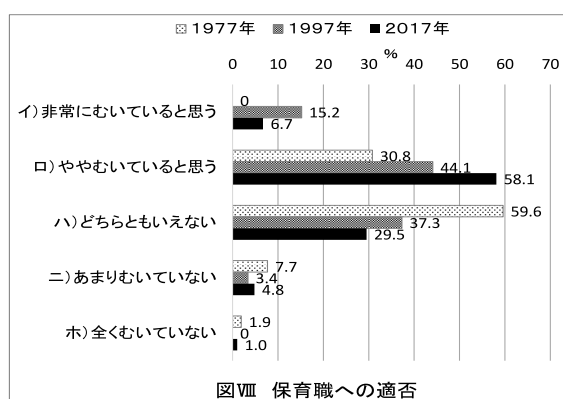
8) 保育者としての必要事項



77年は1位「子どもを理解すること」83.0%、2位「健康であること」67.9%、3位「根気強いこと」49.1%、4位「専門的な知識・技術があること」45.3%、5位「熱意(意欲)があること」「責任感があること」「指導力があること」共に41.5%、97年は1位「子どもを理解すること」83.1%、2位「子どもが好きであること」69.5%、3位「健康であること」59.3%、4位「責任感があること」49.2%、5位「専門的な知識・技術があること」45.8%であった。今回調査では、1位「子どもを理解すること」84.3%、2位「子どもが好きであること」73.5%、3位は今回の調査において初めて項目に入れた「コミュニケーション能力があること」70.6%、4位「専門的な知識・技術があること」59.8%、5位「責任感があること」40.2%である。3回の調査共通に、保育者として必要事項として挙げられたのは、「子どもを理解すること」「専門的な知識・技術があること」「責任感があること」であった。

77年だけに挙げられたのは、「根気強いこと」「熱意(意欲)があること」「指導力があること」である。また「子どもが好きであること」は、97年、今回調査共に2位になったが77年には上位には挙げられていなかった。保育者のイメージV-6でも述べたように当時は保育者主導の保育が展開されていたことから必要事項に挙げられた五つは当然の事項と考える。逆に77年97年に上位にあった「健康であること」は今回調査では6位と低迷した。保育者のイメージV-2でも健康に対する認識が低調であったがここにも現れている。

9) 保育職への適否



77年には、1位に「どちらともいえない」59.6%と高く、次いで「ややむいている」30.8%、「あまりむいていない」7.7%、「まったくむいていない」1.9%、「非常にむいている」ものはいなかった。「親や兄弟に勧められ」「将来の生活に役立つ」から志望した学生多かったが、自らの適性は重視していなかったのかもしれない。時代背景を感じさせられる結果である。

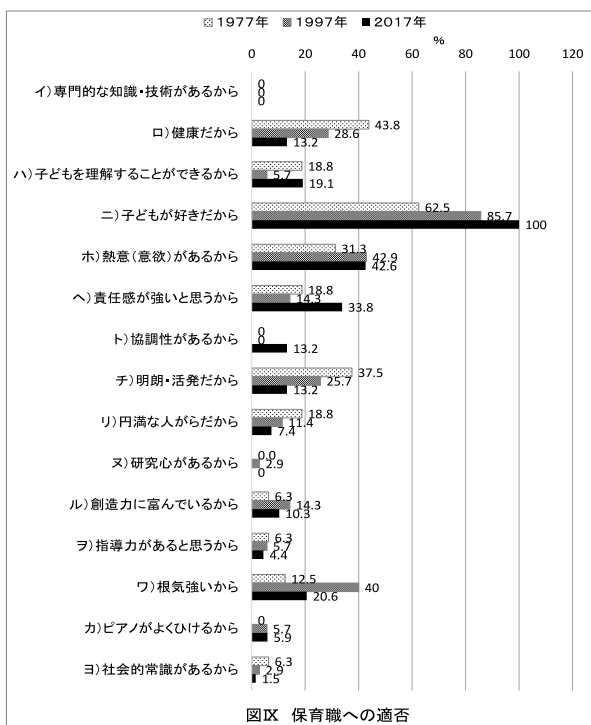
97年は、1位「ややむいている」44.1%、2位「どちらともいえない」37.3%、であるが、次いで「非常にむいている」15.2%と高く、「むいていない」は少ない。保育職に対する意識が高く、自分の意思を持って選択している傾向をうかがうことができる。

今回調査では、1位「ややむいている」58.1%、2位「どちらともいえない」29.5%、3位「非常にむいている」6.7%、4位「あまりむいていない」4.8%、「まったくむいていない」も1.0%いる。「非常に」は97年には及ばないが、「非常に」と、「ややむいている」を合わせると64.8%あり、97年59.3%を上回る。しかし、「あまりむいていない」「全く」もいることも忘れてはならない。

「非常にむいている」「ややむいている」と回答したものがなぜ適していると思うかについて(図Ⅷ)は、77年は1位「子どもが好きだから」62.5%、2位「健康だから」43.8%、3位「明朗活発だから」37.5%であった。

97年は1位「子どもが好きだから」85.7%、2位「熱意(意欲)があるから」42.9%、3位「根気強いから」40.0%。今回調査では、1位「子どもが好きだから」100%、2位「熱意(意欲)があるから」、3位「責任感が強いと思うから」33.8%であった。

「健康だから」は、77年は2位、97年は4位(28.6%)、今回は5位(13.2%)となりここでも「健康」に対する意識の低さが現れている。また、保育現場から求められている「明朗・活発だから」も77年(37.5%)、97年(25.7%)、今回(13.2%)と徐々に低くなっている。保育現場から保育者の素養として求められていることを学生募集の時点で伝えていく必要があると考える。



10) 意識調査のまとめ

40年前、20年前を経て今回調査結果の比較検証をおこない保育学生の意識の移り変わりを次のようにまとめた。

○40年前の保育学生は社会の評価が容易ではない職業という見方が反映されてか保育職に対するイメージは、我慢が必要、束縛感、やや苦しいなどの非好意的な捉えかたが現れている。それだけに自分に対する保育職への適否の評価にも非常に厳しく現れている。

○20年前の保育学生は、男女共同参画社会に向かって、女性の社会進出を援助する社会の仕組みに移行する中で、すでに入学当初より長期間(生涯)保育職に就業したいという強い意思をもっている。また社会が保育職を重視する評価は学生に与える保育職のイメージを明るく好意的なものとしている。志望の理由、保育職への条件に「子どもが好き」が主要な項目として現されている。また、体力面、専門技術面と保育職との関係においては、やや安易な意識を持っている傾向がみられた。専門職とした見方よりも、一般女性の職業とした受けとめが感じられる。

○現在の学生は、女性の社会進出がさらに進む中、20年前の学生同様に入学当初より保育職に就きたい意思は強い。しかし、就業に対する意識は97年とは異なり、自分自身の生活を優先したい意向がうかがえる。また女性が社会に出ることが母親の代わりとなる保育職の需要が高まり保育者不足が問題となっている現在、保育職のイメージは前回以上に好意

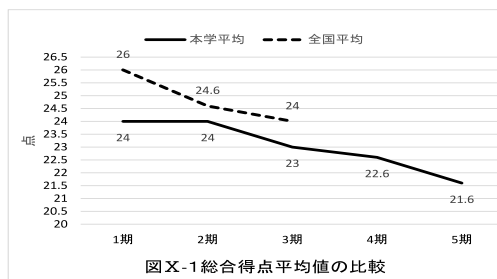
的に捉えており、職に就くことで社会に貢献したい意思を持っている。保育職の条件も、全員の学生が「子どもが好き」を主要項目としている。しかし、保育職の質の向上が求められてきているにも拘らず専門技術面は依然安易に捉えており、体力面に関しては、20年前よりさらに低い評価となっている。

2 体力診断テストから

40年前から現在に至るまでの保育職に対する意識調査を検証してきたが、保育学生の「健康、体力」に関する認識が次第に低調になってきていることが読み取れた。前述したとおり乳幼児期は心身が渾然一体となり成長する時期である。活動の種類を身につけることで運動機能を高めると共に、それが自信となり次への意欲を育てる。共に活動する中で競い合い、教えあい、協力し合う心を養う。また遊びを工夫し創造する力、仲間をまとめるリーダー性も育てられるのである。人的環境としての保育者の体力は、保育職全般の仕事量をこなしながら、子どもの活動意欲を導く環境の設定の上に、子どもと共に活動し子どもの心に共感するために必要不可欠なものと考えられる。健康や体力の必要性を認識し、強靱な体力を持つ保育者を養成するために、意識調査とはほぼ同期間の保育学生の体力の推移を検証していく。

本学では、保育学生の体力の推移を見るために、旧文科省体力診断テストを継続して実施してきた。本研究では、1979年:昭和54年～1983年:昭和58年を1期、1984年:昭和59年～1988年:昭和63年を2期、1989年:平成元年～1993年:平成5年を3期、1994年:平成6年～1995年:平成7年を4期、2016年:平成28年～2017年:平成29年を5期とし、総合判定及び各種目の平均値の比較を行った。

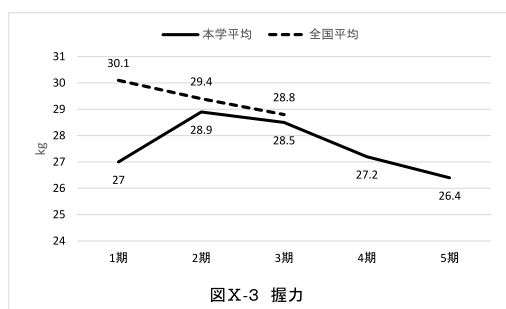
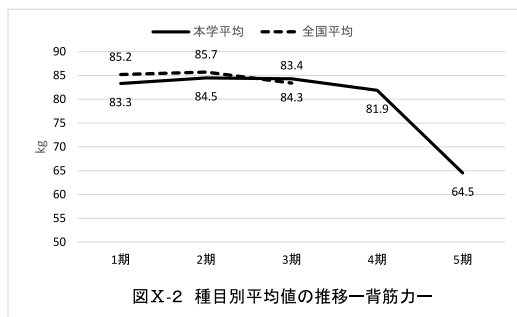
1) 総合得点の推移(図X-I)



全国平均が示す特徴は、第1期、2期、3期へと体力下降傾向が現れている。本学保育学生は、1、2期は同レベルで平成の3、4、5期と下降を示している。50年代前半から全国的に18歳短大生の体力は徐々に低下の現象にあることが読み取れる。

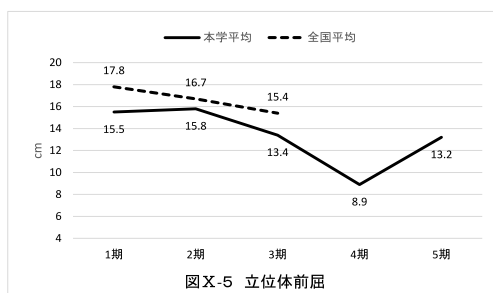
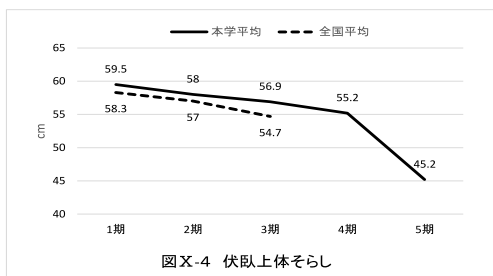
次に体力要素別に平均値の推移をみていく。

2) 筋力(図X-2背筋力・3握力)



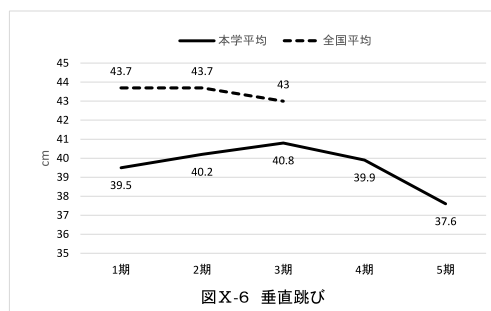
全国、保育学生共に、平成の3期入り低下を現している。特に全国の「背筋力」は急降下を示し、本学学生が上回る結果となっている。しかし本学学生の「背筋力」は4期からの低下は激しくなっている。

3) 柔軟性(図X-4伏臥上体そらし・5立位体前屈)



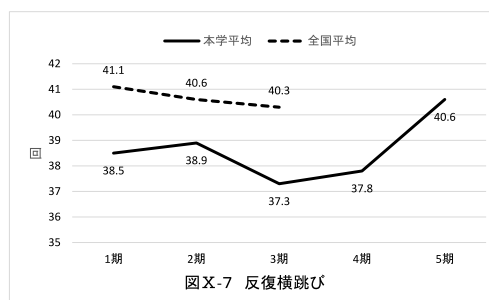
柔軟性をみる「伏臥上体そらし」「立位体前屈」の特徴として、筋力と同傾向を示し3期、平成からの下降が現れている。全国平均との比較では、「上体そらし」が全種目中唯一全国を上回っている。しかし「背筋力」同様4期から急降下を示している。反して「立位体前屈」は4期から5期にかけて急上昇を示している。

4) 瞬発力(図X-6垂直跳び)



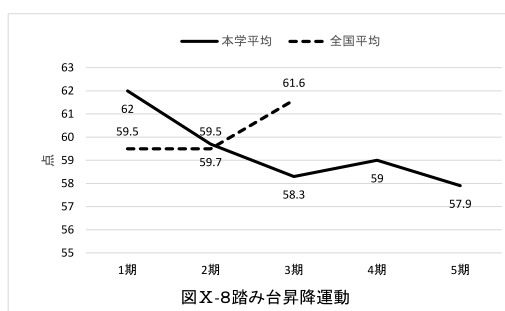
「垂直跳び」は、全国では3期に下降傾向がうかがえるが、本学は逆に緩やかではあるが上昇傾向を示している。しかし他の種目と同様に4期以降は急激に下降している。

5) 敏捷性(図X-7反復横跳び)



1期から3期にかけては、本学学生は全国レベルから大差の下回りを示している。しかし、4期から5期にかけて急激に上昇を示している。この種目は新体力テストでも行われているが全国平均でも平成10年以降上昇傾向を示している。

6) 持久性(図X-8踏み台昇降運動)



1期においては本学学生が大差で上回っているが、3期には下降し下回りを示し、4期にはやや持ち返すが、5期には下降傾向を示している。

7) 体力診断テストのまとめ

1979年より2017年まで、5期に分けて本学保育学生の体力レベルをみてきた。全国18歳短大生の体力は1期から3期にかけて下降の現象にある事が読み取れる。本学保育科入学生の体力レベルも同傾向を示しているが、とくに4期(1994・1995年から5期(2016・2017年)にかけて激しい下降が現れ

ている。特に「背筋力」「上体そらし」で示される「筋力」、「柔軟性」では「上体そらし」、「瞬発力」を示す「垂直跳び」、「持久性」下降現象が現れている。

まとめ

40年を振り返り、本学保育科入学生の保育職に対する意識調査と体力の推移を検証してきた。

1977年から1997年にかけては保育職に対する社会の認識や、女性の労働に対する考え方が変わり保育学生の保育職に対する意識に大きな変化がみられた。その後、国が労働力として女性の力を求め、受け皿と成る保育機関の拡張に力が注がれ、保育者不足が社会問題となっている。このような事態を受け、保育・幼児教育の内容の充実を図るために、保育者の質の向上、保育現場と家庭、地域社会との連携、小学校との連携が重視されている。また雇用条件の改善にもようやく着手された。このような時代背景の中、本学に入学した保育学生の保育職に対する意識は、入学当初より保育職に就きたい意思は強い。しかし、就業に対する意識は20年前の保育学生が考えた「生涯勤めたい」とは異なり、自分自身の生活を大切に、優先したい意向がうかがえる。また保育者不足が問題となっている現在、保育職のイメージはこれまで以上に好意的に捉えており、職に就くことで社会に貢献したい意思を持っている。保育職の必要条件も、ほとんどの学生が「子どもが好き」を主要項目としている。しかし、保育職の質の向上が求められてきているにも拘らず専門技術面は依然安易に捉えられている。また「健康・体力」に関しては、40年前、20年前には減少しつつも条件のひとつと考えられていたが、今年度の保育学生の意識からは外されている状況にある。

体力診断テスト結果からも、明らかに40年前より徐々に下降傾向にはあるが、20年前から現学生の体力がさらに低下していることが読み取れた。とくに運動不足からくる「筋力」「持久性」の低下が著しい。

短期大学の養成期間は非常に短い。しかし、近年保育者に求められる学習内容、保育者として身につけなければならない素養は増すばかりである。学生募集が全入に近いことから「基礎学習能力に乏しい」学生も少なくはない。その上に「体力的に低調」な現保育学生には「学習課題をやりこなせない」「精神面のストレスに弱い」「家庭的に問題を抱えている」などの問題が山積しており、現保育学生では、従来までの養成の

在り方では耐え切れない状況にあり、授業内容、課題、学生との関わり方に時間をかけて考え工夫している。今回の学生の保育職に対する意識の傾向や、体力の問題を鑑み、「子どもが好き」の気持ちを「子どもの為に」のより高い保育者意識に高め、研究心・向上心を育て、しっかりとした教育観を持たせられるよう取り組んでいきたい。またその為にも体力の必要性を認識させ、「動きたい。動くことが楽しい」に加え「乗り越える達成感」を体感させる授業展開を改めて見直していかなければならないと考える。

さらには、保育現場との連携を図り、実習などの体験の中で、保育者の質の向上が強く求められていることをご指導いただく。それを受け養成側でも、「子どもと関わることが楽しい」学生の意識を育てつつ、子どもを理解し子どもの力を伸ばす方法があることに気付き常に向上心を持ち保育を探り、原点である「命を守り育てる、保育の厳しさ」を認識させる指導を積み上げていく必要性を感じている。それでこそ、就職後試練を乗り越えながらも育っていく力を持つ保育者になると考える。そのためには、実習担当者だけではなく、養成にあたる教員が同じ認識を持ち緻密な連携をとりながら取り組まなければ、国家資格を持つ保育のプロパーを育てることはできないと痛感している。

引用・参考文献

- 1) 保育科系短大学生意識調査報告書 日本私立短期大学協会研究委員会 日本私立短期大学協会 1978
- 2) 新しい保育展開の中にみる保育学生の体力度 一運動遊びの指導面に関して— 室みどり・森崎陽子 和歌山信愛女子短期大学信愛紀要 1994 p61-p68
- 3) 保育学生の意識調査 一20年前と比較して— 室みどり・森崎陽子 和歌山信愛女子短期大学信愛紀要 1998 p9-p19
- 4) 最新保育講座7 保育内容「健康」 河邊貴子・柴崎正行・杉原隆編 ミネルブア書房 2016
- 5) ～平成29年3月31日告示～保育所保育指針 幼保連携型認定こども園 幼稚園教育要領 全国保育士会編 日経印刷株式会社 2017

